

持続可能な食事体制をつくる

～ 利用者満足と働き方満足を実現する ～

都道府県： 福井県

会員施設名： 金津サンホーム

発表者氏名： 松井 理佳子、新川 光、山崎 佳子

I. 研究目的

平成29年4月、法人は20年近く委託でおこなってきた給食業務を直営に移行した。理由は、委託業者の人員確保やサービス(調理)水準の確保の困難さ、委託費の上昇傾向への対応があり、併せて食事提供もクックサーブからインカートクックシステムの同時進行で切り替えた。

「インカートクックシステム」とは「電磁誘導加熱方式」といい、特殊な食器に生の食材と調味料を入れ専用トレイにセットをおこない、IHのカートで加熱調理をするシステムである。

目的は「食の楽しみの実現、業務の省力化、コストダウン、食の安全・安心の確保」のためであり、この目的を実現するために、様々な業務内容の精査と標準化、整理をおこない、また直営での運営を持続していくためにコストも視野に入れ取り組んだ。

しかし取り組む中で、一時中止としていた行事食等や労働時間の縮減の課題は残ったが、その課題と目的が現実になっていった。

II. 研究方法

1. 運営を持続させるために、委託と直営との食材費・消耗品費の経費をデータ化し、縮減を図る。また施設全体のガス・水道光熱使用量もデータ化し、低減を図る。
2. インカートに合わせたムリ・ムラ・ムダのない作業工程を立て、人員のレベルアップを見計らいながら試行を実践し、サービス(調理)水準を確保しながら作業労働時間の縮減に取り組む。
3. 食の楽しみを実現させるために、残食調査や嗜好調査を実施し献立に反映。
4. 人員のレベルアップに合わせながら、一時中止とした行事食等を取り入れていく。

III. 研究結果

1. 食材費・消耗品費のコスト削減とガス・水道光熱使用量の低減が現実化となった。
2. 業務の省力化の取り組みにより早朝勤務をなくし、単純化された作業と人員のレベルアップが図れ労働環境の改善と労働時間縮減に繋がった。
3. 残食・嗜好調査の結果を基にメニューに反映させ、行事食等も取り入れていったが「食の楽しみ」を実現させるには新たな課題が見えてきた。

IV. 分析・考察

1. 食材コストの削減は、食材や調味料を計量することと、喫食数のみの食事提供となっているため廃棄ロスが無くなり、また計量することにより調味料の使用量が均一化された。

2. 経費全体をデータ化したことで次年度の着地予想が見える化となり、今後の削減・低減の見通しが運営の保持と持続性に期待ができる。
3. 課題を精査し、業務の多くを標準化と整理したことがスムーズな運用となり、業務の省力化に繋がった。またオール電化にしたことで空調環境が良くなり、省力化と空調環境の向上が大きな労働環境の改善となった。
4. 今後の更なる課題は、「食の楽しみ」を実現するために法人ならではのメニューと味を作り上げていくことだと考えている。

※事例等の使用は利用者本人（家族）の承諾を得ています。

ノーリフトケア

～リフト定着後の効果とさらなる一歩～

都道府県：大分県

会員施設名：ひばり～ヒルズ

発表者氏名：石松 大輔・大蔵 典子

I. 研究目的

- ・利用者の拘縮予防、安全な移乗サポートを行うことで利用者の身体的な変化、アクシデントの減少につながり利用者の安心した生活と生活の幅、生活の質の向上につながる。
また、リフトの使用が定着してきて起きた職員の意識・働きやすい職へと変化してきた過程の振り返りと検証。

II. 研究方法

- ・体に合ったリフト・スタンディングマシーンの使い方をすることで、生活の幅・生活の質を上げる
- ・必要な走行用リフト・天井走行を増やすことでリフト使用の環境を整える
- ・求人情報にリフト使用の項目を上げる
- ・利用者・職員の変化の掌握
- ・同性介護・職員の人数の問題に対してリフトをどう使用したか
- ・リフトの故障・点検の頻度
- ・過去のアクシデントとの比較

III. 研究結果

- ・体に合ったリフト・スタンディングマシーンを使用することで、離床が容易になり、日中活動・リハビリへの参加が増えた利用者全員がトイレでの排せつを行えるようになる
スキントラブルが減少した
筋緊張がなくなりリラックスした姿勢で移乗が出来るようになった
- ・平成22年よりスタンディングマシーンを導入してから、平成28年まで毎年リフトの数を増やしてきて、人力でのサポートをなくし腰痛を訴える職員がいなくなった
- ・求人では「リフトを使用している」ということを掲載することで40代以上の応募が増えた
- ・リフトの台数を増やした
リフトを使用することで、利用者とのマンツーマンの対応が出来る。2人移動では、パートナーを待つ時間やタイミングが合わず、利用者の方を待たせることがあったがリフトを使用することで解消できた
開所当初より同性介護を行っているので、利用者の方が異性からサポートをされて恥ずかしい思いをすることや、職員も抵抗なくサポートが出来る（緊急時は同性介護解除）
- ・点検は年に1～2回程度、今のところ故障はほとんどなくバッテリー等の消耗品の交換はある
(バッテリー交換は3～4年に一度)
- ・アクシデントの減少
- ・リフトを使用してのベット上・車いすでのポジションが整っていないことがある
リフトを使用しているが、ベット・車いす上でのポジションが適正でないと、筋緊張

※事例等の使用は利用者本人（家族）の承諾を得ています。

- ・拘縮へ繋がる
ノーリフト・ポジショニングの正しい技術・知識の習得が必要

IV. 分析・考察

- ・リフトを使用してのデメリットはほとんどないことが今回の研究で再確認できた
正しい知識の理解、使用方法で介助を行えば、利用者・職員にとって有益なものばかりだった
- ・リフトを導入してから使用することが当たり前になり、腰痛等での離職者はいなくなる
人力での移乗介護を行っていた時は、この仕事を定年になるまで続けていけるのだろうかという不安があったが、リフトが導入されてからはこの不安は解消された
求人募集でも40歳以上の応募が増える
- ・ベッド上・車いす移乗時の正しいポジショニングが出来ていないことが多く、正しい
ポジショニングの技術・知識の習得が必要だと感じる
研修会を行い職員の意識、知識のスキルアップが必要だと感じた。